

生徒にも子どもたちにも自分の力を信じて生きていってほしい



玉野 寛子さん（前田・八和木出身）
飯館中学校理科教諭・2年2組担任

震災の時は相馬市の磯部中学校に勤務していて、生徒を亡くしました。磯部中学校は4月の半ばには再開。その年私は2人目の子どもを出産しました。そして、今年度から出身の飯館中学校に転任と決まった時は驚きました。さらに100人もの生徒がいると聞き、村や学校の努力、生徒と保護者の思いがあったのころだと思いました。飯館中学校の生徒たちは、たくましくパワフルです。

私は被災を言い訳にして生きていきたくないと思っています。生徒にも自分の子どもにも、自身の力で生きていってほしいです。

震災後、飯野町から相馬市に通勤していた時、村内の景色の美しさに改めて感動し、「私はここに住んでいたんだ」と実感しました。理科の教師になった原点にも、前田・八和木の実家の周辺で草や土にまみれて遊んでいた経験があります。自分の子どもに、そういう大事な経験をさせられないのは悲しいですが、きれいな村を知っていることは、自分の誇りです。

応援に支えてもらってきた駅伝
村民の皆さんに恩返しをしたい



大内 龍太郎さん（佐須）
村社会福祉協議会・福祉活動専門員

もともと大学卒業後は村で働きたいと思っていました。避難先で就職した会社をやめ、この4月、村の社会福祉協議会に転職。震災以降、大きなイベントや駅伝でしか会えなかった皆さんが事務所に寄ってくれるので、話をしたり顔を知ってもらえたりすることがうれしいです。ずっと住んできて親しみのある村です。村民同士、気持ちが分かりますよね。震災後、特にそう思ってきました。

「ふくしま駅伝」の村チームは、中学生の協力もあり、火・木曜日は福島市の信夫ヶ丘陸上競技場で練習し、個人でも練習をしています。大内家からは6人兄弟の3人が参加しています。

そしてここ最近はずっと、行き会う人から「駅伝は全区間そろろうのか」「メンバーは大丈夫か」と声をかけられています。それだけ村民の皆さんが見てくれていたんだと改めて感じます。大会では、タイムは遅いかもしれないけれど完走し、村民の皆さんや職場の応援に答えて、少しでも恩返しをしたいと思っています。

共同経営牧場を立ち上げ従来のやり方をレベルアップさせたい

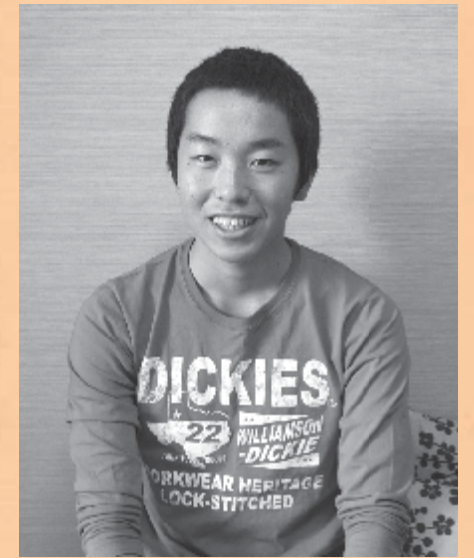


長谷川 義宗さん（前田）
復興牧場「ミネロファーム」

家族と避難する山形県米沢市から職場に通う生活も2年が経過。朝の6時には着いていますよ。NPO法人「福島農業復興ネットワーク」が運営するミネロファームには、北海道から来た180頭の乳牛がいます。社会貢献活動にも力を入れていて、子どもたちを対象にした「もーもースクール」では、仔牛の心音を聴診器で聞かせたり哺乳をさせたりして、酪農体験をしてもらっています。村の小学校からも2年続けて来ていますね。

村は酪農をやる場所としてよい所でした。もったいないです。来年は長女の美羽が小学生になりますし、福島市に転居する予定。同市土船に、牧場を5人で共同経営する会社も立ち上げています。そこでは牛乳の生産の他、たい肥やエサの生産、仔牛の生産・販売・預託などにも取り組みたいと考えます。会社としてやるからには、村にいた頃よりレベルアップしたやり方で、「もうかる牧場」にしたいと思っています。

高校での出会いから広い視野が必要と考えるようになりました



松下 圭太さん（草野）
県立福島高校3年生・元同校野球部エース

高校受験の時は避難先から飯館中学校に通っていました。兄の凌と同じ部屋で勉強していたので押入れが机がわりでした。

野球は小学2年生の時に村の少年野球団「館山ホークス」で始めて、中学校でも野球部に入りました。高校では同じくピッチャーで浪江町出身の手塚周君が、いい友達でいいライバル。甲子園出場の夢はかないませんでしたが、エースナンバーをつけて私立の強豪校と闘い、11年ぶりに県大会のシードも取れたので、やってきてよかったと思っています。

高校では自分を刺激してくれる人が多くて、村の今後にも広い視野が大切だと強く感じるようになりました。全部を震災のせいにするのではなく、一人ひとりが10年後を考えた生き方をしなければと思います。自分は大学でも野球を続けたいので、受験勉強をがんばっているところ。野球選手になれない時は、青年海外協力隊で恵まれない境遇の人に協力したいと思っています。